

時代の航海図

今年是中国の辛亥革命から100年。中国と台湾では盛大な式典が開かれた。近代化の起点とされる辛亥革命をどう歴史的に見るか、また今日の意味とは何か。中国研究の第一人者に聞いた。

史実の見直しを

辛亥革命は孫文が主導。1911年10月に革命派が清朝を打倒、12年に中華民国が建国された。孫文は臨時大統領となるが全土を掌握できず清朝官僚の袁世凱に権力を譲る。袁世凱死後、軍閥が割拠。日中戦争、国共内戦を経て49年に中華人民共和国が成立した。

中国共産党は、49年革命は、未完の孫文革命を継承し成功させたことを公認学説とする。だが、そうした共産党史観に対し横浜市立大名菅教授の矢吹晋氏は「政治的な断定だ」と疑問を

辛亥革命から100年

新たな歴史検証必要

文

化

袁世凱は、日本が強く利権を求めた15年の対華21カ条を受け

入れ「売国奴」とされてきた。しかし矢吹氏は近年の研究を踏まえ、袁世凱が21カ条に苦悩し、外交交渉で時間を稼ぎ、英国に情報ネットワークして圧力を期待するなど主権を守るため一定の尽力をしたと指摘。

一方、孫文は有名な「大アジア主義演説」で「(日本は)亜細亜の最も信頼すべき番兵」と述べ、日本に「満州は日本に任せる」と約束するなど非愛国的な言動もあった。矢吹氏は「孫文も間違いを犯した。史実の検証が必要」と孫文の絶対化は硬直した史観とみる。

辛亥革命からの100年は「日中の複雑な絡み合いの歴史」でもあったと矢吹氏。「辛亥革命は明治維新に刺激された革命

だった。だが中華民国は弱く、日本の帝国主義の餌食となった。中国の20世紀は経済をほとんど無視した『革命の時代』だったが、改革開放後は経済で日本に追い付こうとした。そして昨年、国内総生産で日本を追い越した」と歴史をたどる。

「100年の節目を考えると、中国が経済大国となり、日本への被害者意識から脱却する条件が整いつつある。日中関係の好転も期待できるが、中国の覇権主義的傾向もあり、新たな複雑な時代に入った」と矢吹氏はみる。

異なる現実

国際教養大学の中嶋雄雄学長は「フランス革命やロシア革命に比べると、辛亥革命は本当の意味での社会革命ではなかった」との歴史観を示す。「革命の課題は満州族の清朝を倒し漢民族の世界をつくる権力奪取。新しい『王朝』ができたにすぎず、共産党政権になるまで『中華帝国』には変わりがない」と話す。

中国で孫文は「国父」と崇拝される。だが、その崇拝こそが民主主

義が不十分で、複雑な民族問題を抱える中国の「弱点」の現れだという。「国内の矛盾を隠蔽するために孫文を統一の象徴としてあがめるしかない。孫文は『五族共和』『三民主義』を唱えたが、今も中国は漢民族中心で独裁体制。孫文のスローガンと現実が大きく異なる」

孫文は「革命未だ成らず」と言い残して25年に死去。中嶋学長は「まさに『未だ成らず』だった。毛沢東は共産革命を『新民主主義革命』と言ったが、三民主義と全く違う独裁へと向かった。天安門事件の民主化弾圧、そして現在も政治改革は進まない」と中国の革命の「未完性」を指摘。

一方、台湾でも孫文は国父だ。中嶋学長は「国民党が来たので国父になったが、孫文と台湾は全く関係がない。国民党は独裁をし、90年に本省人(台湾)に現住していた人々の李登輝が初めて民主政権をつくった。李登輝は孫文についてほとんど語らない。その李登輝が三民主義に近づけた」と歴史の皮肉を見てとる。

「日本でも孫文は英雄視されているが、中国の本音と建前を知るためにも、辛亥革命の歴史は相対化しなければいけない」(中嶋学長)。批判的視点も含め、孫文や中国の革命をめぐる歴史検証は積み残されているようだ。



中国で開かれた辛亥革命100周年の記念大会。10月9日、北京の人民大会堂